

琉球大学学術リポジトリ

日本の「女の歴史」と琉球・沖縄 —山路愛山の社会史研究—

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 琉球大学留学生センター 公開日: 2012-04-19 キーワード (Ja): 山路愛山, 女の歴史, 琉球・沖縄, 良妻賢母, 婦人の解放 キーワード (En): Yamaji Aizan, women's history, Ryukyu/Okinawa, good wife and wise mother, liberation of women 作成者: 伊藤, 雄志, Ito, Yushi メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/20.500.12000/24138

日本の「女の歴史」と琉球・沖縄 —山路愛山の社会史研究—

伊藤雄志

要旨

明治大正時代のジャーナリスト山路愛山は、日本および琉球などの「周辺地域」における女性の社会生活に注目し、戦後に盛んになった社会史研究に先行する史論を発表した。沖縄学の父伊波普猷と同様に山路は日琉同祖論を主張し、明治政府による琉球処分を肯定的に見ていた。しかし山路は、単に「帝国主義的」な琉球観を抱いていたのではなく、琉球を含む日本列島における女性の商業・宗教上の活動に注目し、良妻賢母を支える家父長制が建国以来の日本固有のものだという当時の通説には根拠がないと批判した。本稿では、歴史における女性の社会的役割に注目した新井白石の業績を高く評価した山路が、琉球などの「周辺地域」を日本史研究の中に取り込み、さらに儒教主義に基づく紋切型の日本女性像を是正し、「婦人の解放」の必要性を訴えていたことを明らかにしたい。

【キーワード】山路愛山、女の歴史、琉球・沖縄、良妻賢母、婦人の解放

1. はじめに

安良城盛昭は、日本史学史における社会史の源流として、雑誌『歴史と民族』（1919—24）と『社会史研究』（1924）を主宰した喜田貞吉とともに、琉球・沖縄史研究の開拓者伊波普猷を取り上げている。安良城によれば、日本社会史研究は、1930年代のフランスのアナール学派を輸入した学問でもなく、網野善彦が1970年代後半に創出した学問でもない。1900—1910年代から、伊波は社会史的手法によって琉球・沖縄史の研究を行っており、彼の研究は「日本における社会史研究の疑いもない源流」であった（安良城1989, 6）。だが明治大正時代の日本本土の知識人山路愛山（1865—1917）も琉球・沖縄を歴史研究に取り込み、戦後の社会史研究を先取りしていた（伊藤2008；伊藤2010）。

安良城盛昭が日本社会史研究の源流と見なした伊波普猷は、1911年の処女作『琉球人種論』の中で日琉同祖論を体系的に論じたことで知られている（金城・高良 1984, 64—9）。伊波と同様に山路愛山は、「琉球と日本本土と其住する所の人民は共に均し

く日本人種」だという日琉同祖論を主張し(山路1909a, 18), 明治政府による琉球処分を肯定的に見ていた(山路1929, 461-2)。⁽¹⁾ このため山路はアジア地域の植民地化を正当化した知識人だと見なされている(Tanaka 1993, 214; 工藤1979, 176; 小熊1996, 100; イ2002, 242)。⁽²⁾ しかし山路は, 単に「帝国主義的」な琉球論を展開したのではなく, 琉球・沖縄などの日本の「周辺地域」から見えてくる新しい「女の歴史」を考察していた。彼は琉球・沖縄を含む日本列島における女性の社会的役割に注目し, 当時の良妻賢母教育を支えた家父長制が建国以来の日本固有のものだという通説には根拠がないと主張した。本稿では, 歴史における女性の社会的役割を重視した江戸時代の学者新井白石の業績に注目した山路が琉球・沖縄を日本史研究に取り込むことによって, 儒教主義に基づく紋切型の日本女性像を是正し, 「婦人の解放」の必要性を訴えていたことを指摘したい。すでに山路の婦人解放論は, 彼の自由主義教育論の一環として論じられているが(伊藤2005, 57-64), 本稿では山路の「女の歴史」・婦人解放論を彼の琉球・沖縄研究との関係から捉え直してみたい。

2. 「女の歴史」への関心

戦後の日本中世史家網野善彦は, 男性中心の歴史像の中で無視されてきた女性の宗教・商業上の活動を取り上げることの重要性を指摘した(網野2000, 16-7)。同様の指摘は, 民俗学者柳田国男や伊波普猷が戦前にしていた。1913年創刊の『郷土研究』の頃の柳田国男の研究主題は, 巫女などの「社会の片隅に押しこまれたり社会の枠外にほとんど放逐された存在の復権」であった(鹿野1983, 72-3)。柳田は「妹の力」の中で, 歴史の舞台で「女性の出で働く数は甚だしく少なかった」けれど, 政治や戦争の事業にも女性が「隠れて参加した力は実は大きい」と主張した(柳田[1925]1990, 33)。また伊波普猷は, 1911年9月発刊の『青鞥』に代表される日本本土における女性問題の提起に応じて, 沖縄女性の精神界, 経済生活における働きに関心を持ったと言われている(鹿野2000, 129, 131, 134)。⁽³⁾

ところが, 伊波普猷や柳田国男より早くから山路愛山は, 女性の社会生活に関する史論を発表していた。『新井白石』の中で山路は, 新井白石の地理的視野の広さを評価し, 人心が沈静し, 天下に「海の外」があることを説かなかつた元禄の泰平の世に, 彼が「国の四境」に目を注ぎ, 歴史における女性の役割を論じたと指摘した(山路[1894a]1958, 217)。「歴史家としての新井白石」の中でも山路は, 社会における女性の働きを重視した歴史家として新井白石を高く評価した。山路によれば, 新井白石は

「従来社会の半面を占めながら，歴史に用なきものとして顧みられざりし婦人」に注目し，幕府の中における彼女達の「勢力の慢るべからざる」を認めた（山路[1892]1983，69）。新井白石は「歴史家たる鍵の一個」を得て，「歴史上の大原素」，「丈夫の半身」としての女性を観察することを怠らなかった。歴史家にして「婦人を『ゼロ』視する者」は，良い歴史家ではないと山路は考えたのである（山路[1892]1983，69-70）。

「女の歴史」に関心を持った山路愛山は，次に検討するように，日本の家族制度の変遷について論じ，琉球・奄美を含む日本列島で女性が商業などにおける労働力として重要だったこと，また女性が巫女として重要な役割を担っていたことを指摘し，従来の男性中心の歴史研究を批判した。女性の社会的役割を重視する彼の視点の背景には，人間精神を抑圧する儒教主義に基づく良妻賢母教育に対する疑問があった（山路[1893]1983，110-1）。

3. 家父長制と良妻賢母教育

明治大正時代の国家主義教育では，家父長制が日本の国体の精華の一つとして称揚され，「妻たり，母たることのみが婦人の天職」だという通念があった（鹿野1983，180）。さらに明治天皇の大葬が行われた1912年9月13日に陸軍大将乃木希典夫妻が殉死してからは，乃木夫人が良妻賢母の模範とされるようになった。明治維新以降の家族制度に対する意識の衰退や道徳心の腐敗を止めるために，大正デモクラシーの時代においても良妻賢母が求められたのである（清水1995，14-20）。ところが山路愛山は，このような家族制度が日本古来の伝統ではないと考え，家父長制を支える良妻賢母教育を批判した。⁽⁴⁾

山路愛山の「女の歴史」に関する見方は，日本人の家庭が歴史的变化を遂げており，それに伴って女性の社会的役割も変化してきたというものであった。「日本及び日本の女」の中で山路は，「女の歴史」は「家庭の歴史」であり，「家庭の歴史」は「国の歴史」だと主張した（山路1916，14）。⁽⁵⁾ 山路によれば，「女の歴史」は「社会の歴史の片碎」であり，女性を取り上げることによって，歴史を見直す必要がある（山路1916，11）。世間の論客は「日本の道徳は家庭を基礎とせざるべからず，家庭は賢妻良母の天地にして是あるが為に，日本の国民性は特別の発達をなしたり」と言う。しかし，家庭の内容は時代によって異なる。徳川時代に武士の家庭は，「地主の家庭」から「軍人の家庭」となった。「地主の家庭」では，その主婦は領地から生じる収入

を管理し、三河武士の女性は機を織って家計を助けた。しかし、「地主の家庭」は、城下町に住む「軍人の家庭」となり、武士の妻は生産に関係しない「寄生の動物」となった。その任務は、子供を生み善き武士となるように教育することだけになった。ところが、そのような時代でも「町家の家庭」は全くこれと異なり、家庭工業中心の明治時代以前において、女は町人の家庭では生産者として家の盛衰に影響を与えた。しかし、明治時代になって手工業から工業に推移して、「家庭の経営」が「製造所の経営」となると、資本家の妻女は「寄生虫」と同様になった。また平民の妻女は家が生産機関ではなくなったので、家計を助けるために工場通いをするようになった。このように「日本の道德の基礎」と世間の論者が考えている家庭は世の流れとともに変化してきたので、女性の社会的役割もこの変化を度外には理解できない(山路1916, 12-3)。家庭の内容は歴史的に変化しているので、今日「紋切型の賢妻良母」を産出しようとするのは、「夏の座敷に炬燵を持ち出す」のに似ている(山路1916, 13)。それ故、時代遅れの儒教主義に基づく良妻賢母教育は誤っていると山路は考えた。

日本の家庭の変遷については戦後に井上清が、山路と同様な視点から、「いわゆる日本古来の家族制度」が封建支配者である武士の家族制度であり、百姓町人らは武士よりはるかに自由な親子夫婦男女の生活をしていたと論じた(井上清1955, 15)。また脇田晴子は、中世における「家」が社会労働の場であり、家内労働との区別がなかったと述べ、「家」のあり方の変化が女性の地位の低下をもたらしたと主張した(脇田1995, 243)。さらに網野善彦は、従来の研究では戦国時代から江戸時代に家父長制が確立しており、女性は無権利で抑圧されていたと考えられていたけれど、「実態はかなりちがって」おり、14世紀以前の女性に関する史料を見ると、女性たちは江戸時代よりも「はるかに広い社会的活動」をしていたと主張した(網野1991, 162-3)。こうした井上、脇田、網野の研究よりはるかに早くから山路愛山は、鎌倉時代の女性が親の財産を相続できたので江戸時代の女性より自立していたと考え(山路1908b, 4)、日本における家族制度の変遷と女性の社会的役割と地位の変化に注視し、良妻賢母教育に疑問を抱いていたのである。

4. 家父長制と母系制社会

さらに1908年の『為朝論』の中で山路愛山は、過去に母系制社会が存在したことから、日本の家族制度に変化があったことが分かると主張した。後に『女人政治考』に

において佐喜真興英も、古琉球に母系制があったと論じた（佐喜真[1926]1982，94）。また今日では、明治以前の八丈島が「家は女のもの・女の系列で家を継ぐ」という母系意識の濃厚な社会であり、天正年間までは家に婿を取る招婿婚がおこなわれていたと言われている（長野1999，42）。山路は古琉球の母系制には言及しなかったが、同じ離島である八丈島の母系制に注目した。

『為朝論』の中で山路愛山は、人間の歴史は「富の分配の歴史」だと述べている。富を持つものは、生活に余裕があるので、「知識と美術の保護者」となり、兵器を蓄え、奴隷を養って富なきものを圧倒する（山路1908a，1）。源為朝の時代の富は土地であり、人間社会は「土地を有する人」と「土地を有せざる人」という二つの階級に分かれていた（山路1908a，2）。土地を持たない階級には、日本全国の宿駅で色を売って生活する遊君，遊女，白拍子がいた（山路1908a，2）。『更科日記』と『東鑑』によれば、遊女の長は代々女性であり、遊女の生んだ女子もその母の業を継いで代々遊女となった（山路1908a，3）。また『北条五代記』には八丈島では家主は女であり、男は「入婿」だと書かれている（山路 1908a，3）。伝説によれば、八丈島は「女護島」と言われた。これは男系を主とする部落が、女系を主とする部落を指して、「女の国」と呼んだものが転化したものと考えられる。「男系を主とする種族」に征服された「女系を主とする種族」の「遺物」が遊女かも知れない。⁽⁶⁾ 山路の考えでは、遊女や遊君が女系を主とする「別種族」のようであったことは「疑うべからざる」事実であった（山路1908a，4）。このように遊女社会や八丈島にいた「女の系図」を重んじる種族は、種族間の生存競争時代の「遺物」であり、かつての日本列島には「女の系図」を重んじる種族が広く住んでいたと山路は考えた。

非農業民である遊女，傀儡，白拍子などは、社会の中で賤しめられた少数派と見るのが「常識」であり、「化外の民」として制度の枠外に置かれた存在だとする見方が強く、「異民族」だという考えまでであった（網野1996，112）。これに対して網野善彦は、遊女，傀儡，白拍子の実態を追究してみると、少なくとも鎌倉時代までは、「卑賤視の対象」ではなく、逆に権力はこうした集団を制度の枠外に放置しなかったと主張した（網野1996，115）。網野と同様に山路愛山は、土地を持たない非農業民である遊女が権力者と深い関係があったと考え、単に虐げられた人々だとは考えなかった。『為朝論』の中で山路は、平清盛が厳島神社の内侍を寵したという『平家物語』の話を取り上げ、色を売っていたのは、遊女，遊君，白拍子，傀儡子だけでなく、巫女，神社に奉仕する内侍も含まれたと指摘した（山路1908a，4）。⁽⁷⁾ また「歴史の話」の

中で山路は、白拍子という遊女が「貴族的」であり、社会的地位も高く、今日の芸者の「比ではない」し、その今様も今日の「どどいつ」の類ではなかったと論じた(山路[1894b]1983, 181)。1909年の『足利尊氏』でも山路は、遊君、傾城、白拍子、傀儡子は、単なる「一種の賤民」ではなく、朝恩によって、あるいは後家となって、「荘園の領主」になるものもいたと指摘した(山路1949, 75)。このように、「女の系図」を重んじる種族は、「男系を主とする種族」に征服されたとしても、「卑賤視の対象」として低い地位に甘んじていたのではなかったと山路は考えた。

後に佐喜真興英は、原始母系は他民族の父系によって征服されたという説を紹介し、朝鮮、日本、琉球、台湾の母系が支那の父系に征服された可能性があると指摘した(佐喜真[1926]1982, 121)。また高群逸枝は、佐喜真の『女人政治考』が「上古の日本の女治(母系、母権に関連して)の存在」を「最も早く史実に拠って立証した書」だということに注目した(河野1990, 189)。高群自身は、戦前の国家体制・家制度のもとでの女性の低い地位に疑問を抱き、女性がまだ従属しきっていない社会の仕組みを古代に見出し、これを「母系制の名残り」だとした(義江2004, 58)。鹿野政直は、高群が「日本の古代における母系の存在を論証し、家父長制を日本固有の美風とする家族道徳観に一撃」を加えて「日本における女性史学の始祖」となったと述べている(鹿野1999, 280)。だが佐喜真や高群より早くから山路愛山は、母系制の存在に注目し、昔の日本に「女の系図」を重んじた種族がいたことを示し、家父長制が日本の国体の精華の一つだとはいえないと考えていた。

5. 家父長制と女性の商業活動

母系制だけでなく、家庭外で商業に従事する女性の存在は、家父長制を支える良妻賢母の理想とは相容れないものである。網野善彦は、「女性と宗教・芸能との関わり、さらに交易との関係」が非常に古いものだという見方を示した(網野1990, 162)。また『沖縄県の歴史』では、琉球王国の首里・那覇の市場で女性が商業に従事していたことが指摘されている(安里2004, 194-9)。これと同様に山路愛山は、女性の商業活動に注目し、このような活動が日本本土だけではなく、琉球を含む日本の周辺地域にも見られたと主張した。

山路愛山は『信濃毎日新聞』の記事の中で、新潟を「女の国」と呼んで、その女性の商業活動について書いている。彼によれば、新潟では新聞を配達したり、氷を売ったりする女が多い。港町として栄えた沼垂(ぬつたり)の魚市と青物市は、「女の市」

である。ここでは中流以下の女は亭主を持っていても「食はせられぬ位ならば亭主を持たぬが善い」と言われた（山路1900b）。また日本本土だけではなく、琉球・奄美にも古くから女性が外での労働に従事して家庭を支えた。『古事記』『日本書紀』に、日本上代には女が「酋長」であったと記されている。こうした風習は今日でも琉球や奄美に残っており、そこでは女だけが働き、男は女に養われることもある。これは女が男のために軍旅にも農業にも商業にも従事した時代の「遺物」であった（山路1900b）。このように山路は、琉球や奄美の「男逸女労」が古代日本の風習の名残だと見なした。⁽⁸⁾

さらに、『女子文壇』の中で山路愛山は、「中流以下の女」の働きについて論じ、働く女性が男に対して卑屈だとは限らないと主張した。山路によれば、上総の長者町周辺は、よく女が稼ぐ所で、方々に市が立ち、女が遠方からでも重い物品を持って来る。市で働くだけでなく、家で耕作する場合でも女の方がよく働くことになっている。「女が稼いで男を喰はす」というのは新潟付近と同様である（山路1909b, 19-20）。日本の民情を考えれば、上流の家庭では男が女を養うということになっているが、中流以下の家庭ではそうではない。儒教主義で固められた「大人しい婦人」を中流以下の階級に見出すことは出来ない。そこでは家庭での権力は「細君」にあり、「亭主の独断」が行われず、「女大学的の道德」がすべての日本の婦人を支配しているわけではない。男女は同権であり、ある一面においては確かに「女が権力を有して」と山路は論じた（山路1909b, 20）。⁽⁹⁾ また西洋人の中にはアジア女性は「奴隷同様の扱い」を受けており、「無知」、「卑屈」で男の機嫌を取ってばかりいると言う者がいる（山路 1905, 10）。しかし、西洋人が「内幕に入らず、ただ上面を一寸見た」だけでアジア女性を批判するのは「笑止の至り」だと山路は批判した（山路1905, 11）。このように山路は、封建的な「女大学的の道德」が日本婦人を支配しているとは考えず、紋切型の良妻賢母という女性観を否定した。

6. 家父長制と女性の宗教活動

山路愛山は、商業だけではなく、宗教上の女性の活動にも注目した。彼は、中国の正史である『魏志倭人伝』や『後漢書倭伝』にある「女王国」に関する記述に強い関心を示し（山路1900b；山路1914a, 7；山路1914b, 2；山路1966, 230-1）、このような女性の宗教的指導者が社会的活動をする古代の風習が今日の琉球・奄美に残っていると考えた（山路1900b）。

1914年の「日本国民史草稿」の中で山路愛山は、耶馬台国の女王が「鬼神に仕え、衆を惑わす」という『魏志』の記述を取り上げ、その時代の女性が人心に強く影響する宗教の威力を借りて祭政一致の政治を行ったと論じた。彼によれば、耶馬台国だけではなく、琉球でも同様のことが見られた。すなわち、新井白石の『琉球事略』によれば、琉球において神託を受けて祭祀を掌るのは女性であり、この託女の中の33人は王と同族で、王妃もその一人であった(山路1914a, 7)。このように山路は、新井白石の琉球に関する著作を参照して、琉球女性が宗教上の影響力を使って祭政一致の政治を行っていたと論じた。

さらに遺稿となった「日本人民史」の中で山路愛山は、日本神話にある「女巫」がヨーロッパの史家が言う「シャマニズム」と密接な関係があると主張した。彼によれば、シャマンは女真(昔の満州)では「女巫」と言った。シャマニズムは、「女巫」の教えで、神杆を立てて神を祭る。日本の古代においても宗教は「女巫」が教えるものであった。その証拠として、『古事記』『日本書紀』によれば、日本では神主の多くは女性で、男性はまれであった。『令集解』にも、中古に唐国の文物を採用した後でも、巫(かんなぎ)は女性であったとある。『類聚三代格』にも、神に仕える諸社の祝(はふり)には、中世までは女性が多かったとある。上代には猿女君(さるめのきみ)などという神に仕えることを職とする女性がいた。皇室は皇女を伊勢の斎宮に当てた。胸方神(むなかたのかみ)を祀る時に、采女(うねめ)を遣わしたと『日本書紀』に書かれている。さらに、『和名抄』で、女巫をカンナギと呼び男巫をヲノカムナギと言うのは、神に仕えたのが、始めは女性だったことを示している。女性に宗教を任せるのは「日本島」だけではなく、琉球も女巫の国であったことは、新井白石の『南島志』などにも書いてあると山路は指摘した(山路1966, 230-1; 山路 1914b, 2)。

山路愛山が参照した新井白石の『南島志』は、陳侃の『使琉球録』(1534)や袋中の『琉球神道記』(1605)などに基づいて書かれた琉球地誌である。この『南島志』には、琉球の女性が宗教活動に従事したことが次のように記されている。

神所憑之女 稱謂君者三十三人 皆酋長之女 其長稱謂聞補君 其餘所在神巫 百千爲群 神有時而降 鼓舞歌謡 以樂其神一唱百和 其聲哀惋 神喜則衆皆相慶焉 神怒則衆無不懼焉 (新井[1719]1996, 274)。神のよりつきたもう女は君きみと言って、三十三君である。すべて按司の娘である。その上に立つのを聞補君きふふぎみ(聞得大君きこえおおぎみ)と呼ぶ。その他、各地の神巫のろは百千もあって群をつくる。神は、時として降りる。鼓おをうち、

謡おもろをうたい，舞をまっつてその神をなぐさめる。ひとりが唱となえると，皆が和あわせ，その声は物がなしい。神がよろこぶと，人は互いによろこびあうのである。神が怒れば，人々は懼おそれないものはない（新井[1719]1996，163-4）。

このような霊威に依拠した女性政治が，古琉球で行われていたということは，後に佐喜真興英が『女人政治考』の中で主張した（佐喜真[1926]1982；豊見山・高良2005，198）。佐喜真は「おもろ」を解説し，古琉球に女君が存在し，その霊力で島国を支配していたと論じた（佐喜真[1926]1982，46，55）。⁽¹⁰⁾ だが佐喜真より早くから山路愛山は，琉球女性の宗教活動に注目し，従来無視されてきた女性の社会的役割を考察していたのである。

7. 女性の解放

以上のように山路愛山は，女性の社会的活動に注目し，家父長制のもとでの良妻賢母が日本の伝統だという通説とは異なる視点から歴史を見ていた。彼が家族制度の変遷や「女の歴史」を研究したのは，良妻賢母教育を批判するためであり，女性が社会的活動に参加するべきだという考えがあったからである。⁽¹¹⁾

『信濃毎日新聞』の「芸妓廃止の第一歩」の中で山路は，日本社会で重要な役割を演じている芸妓を廃止する方法を論じた（山路1899）。彼によれば，西洋では貴婦人が勢力を持ち，重要な政治的問題を左右することがある。他方，日本にはこのような有力な女性はいなかったが，御殿女中が幕府において意のままに活動して，喜怒愛憎によって政治家の進退に影響を及ぼすことがあった。⁽¹²⁾ 明治維新以降このような風習がなくなり，御殿女中のように政治権力を持つ女性がいなくなった。しかしながら，芸妓が御殿女中の代わりに現れ，社交界で力を行行使うようになった（山路1899）。芸妓は社交術を身に付けている女性として最もよく教育を受けており，西洋社会における貴婦人と同じ社会的役割を果たした（山路 1899）。こうした社会的役割を果たしている芸妓の廃止方法として山路は，第一に，女子教育を普及させること。第二に，女性が読める文学を盛んにすること。第三に，女性が会合に出席するのを奨励することを挙げている（山路1899）。これらを実行すれば，芸妓は自然に社会の中で必要でなくなると山路は考えた。

さらに，『信濃毎日新聞』の「夜の国」の中で山路愛山は，少女の身売りの問題を取り上げた。山路が意味する「夜の国」とは，「人情の光の照らさぬ」国であった。

「罪なき少女が買女に売られても」、吾は関せずとすましている者は、「守銭奴」に等しい。「世の中の怪物」は山の穴に住んでいるのではなく、人の世の不幸を見捨てる「夜の国」に住んでいると山路は主張した(山路[1900a]1917, 402-4)。このように山路は、少女の身売りの問題を無視する世間の風潮を批判したが、これと同様の主張は伊波普猷もしていた。『沖縄女性史』の中で伊波は、人道の視点から廃娼論を絶叫しても、その理想は急に実現されるものではないと論じた。(伊波[1919]2000, 76) すなわち、現実には沖縄の政治家・実業家・教育者の会合が辻遊郭で開かれている。このような問題は、女子教育を盛んにして自覚した女子が家庭で勢力を得ない限り解決できないと伊波は述べている(伊波[1919]2000, 76)。⁽¹³⁾

山路愛山や伊波普猷が芸妓廃止・廃娼を論じていた明治大正時代の日本において、女性は帝国大学には入学を許されず、文壇は男性原理で占められ、女性には戦後の1945年まで参政権はなかった。女性が帝国大学入学を初めて許されたのは、1913年に東北帝国大学理科大学が開学と同時に、その入学資格を男子のみの高等学校卒業生に限らず、中等教員免許状所有者に開放した時であった(津田塾理科の歴史を記録する会1987, 21)。また与謝野晶子は、婦人の小説家が成功するためには、男性の小説を模倣することをやめ、「自己の感情を練り、自己の観察を鋭くして、遠慮なく女の心持を真実に打出す」ことが大切だと主張し、男性原理に支配されている文壇を批判した(与謝野[1909]1985)。

1912年に自由主義者石橋堪山は、「良妻賢母主義の教育を廃し」、婦人を「一日も早く社会上経済上の彼らの地位を自覚し、これに処するの途を講じ得るが如き者にする」ことを希望すると述べた(佐高2004, 190)。同じ年に山路は、女性の解放のためには、「良妻賢母」という世間体から解放される必要があると考え、「近頃婦人の自覚とか、婦人の解放とか云って居るが、私はそう云う問題の根本になる此の世間体から解放せられ、自分は自分で出来る丈けの生活、独立した生活をする」と云う方面の努力がのぞましいと思って居る」と主張した(山路1912a, 4)。山路は、現代の教育で根本的に間違っているのは、「女子の生活」を顧みないで、ただ「賢母良妻を仕立上げることに傾いて居る」ことだと考えた(山路1908, 4)。⁽¹⁴⁾

国家主義に基づく良妻賢母教育に対抗して表明された山路の女子教育論は、人間精神の解放を求めた彼の自由主義教育論の一環であった(伊藤2005, 39-73)。すなわち、水戸学派の伝統を引き継ぐ国家主義者が忠君愛国の精神を重視したのに対して、山路は強い抵抗の精神を持った強い個人が、強い国家の発展と建設に貢献できると考

えた。それ故、彼は次のように述べている。

政府は天皇の政府に相違なし。さりながら人民も天皇の人民なり。天皇の億兆（万民）を子として養ふが日本の国体なり。其政府が天皇の赤子たる人民を悩ますとき、人民が起って抵抗するは何故に不忠なりや（山路1966，202）。

山路は、もし政府が天皇の信任に背いて人民を悩ますならば、人々は政府を倒して新政府を作るべきだと主張した。天皇の赤子として女性を含む日本国民が解放され幸福になることが、日本を世界で比類ない国にするというのが彼の天皇観であった。

8. おわりに

琉球・沖縄史と日本本土史は、独自の文化を育んだ琉球王国に日本の天皇制がなかった点で大きく異なる。この日琉の歴史的溝を山路は、羽地朝秀による琉球の正史『中山世鑑』に書かれた琉球最初の王・舜天が清和源氏の後裔である源為朝の子だったという伝説によって埋め合わせられると考えた（伊藤2008）。この意味で山路の日琉同祖論は、明治政府によって推進された沖縄の皇民化政策を翼賛するものであったと言える。だが山路の天皇観は、沖縄を含む日本の人民の心の自由を主眼とするものであり、儒教に基づく家父長制を日本固有のものだとする発想とは根本的に異なっていた。

山路は日琉同祖論を肯定的に見ていたが、単純に新井白石の日琉同祖論に追従したのではなく、日本の「周辺地域」を歴史研究に取り入れ、新しい視点から日本を見直すという作業を試みた。第一に、彼は琉球などに見られるように、女性が商業などの労働に従事して家庭を支えていたと指摘した。第二に、女性には霊的な力があると考えられたことから、祭政一致の時代には女性が宗教的権威と政治的権力を持っていたと指摘した。このような歴史観は、家父長制が建国から日本固有のものであったという国家主義思想の根底を揺るがすものであった。

山路愛山の歴史研究は、戦後に日本史像の再構成を提起した網野善彦の問題意識と共通点が見られる。⁽¹⁵⁾ 網野は、「日本史」という枠組みを自明の前提とする歴史認識に批判を加え、従来の日本島国論に基づく日本史においては、北海道、沖縄が欠落している場合が多かったと指摘した。また、北海道、沖縄が言及される場合でも、日本列島の人間社会の歴史全体の中で、「その独自の位置づけを与えられる」ことはなかった（網野1993，29；藤澤2000，60）。沖縄出身の学者の間でも、琉球・沖縄を含

めた日本史像の必要性が指摘されている。安良城盛昭は、「日本がよく見えるためには、沖縄を深くとらえることが必須の前提となる」と主張した(豊見山2003, 13)。高良倉吉は、古琉球の歴史的意義が正しく評価されていないと指摘した。例えば、伝説上の琉球初代の王舜天が源為朝の息子だということを根拠に、琉球王国は清和源氏の系統に属し、「一見特異にみえるその歴史過程も所詮は日本史の傘下にあるもの」と主張する歴史家が多かった(高良1993, 179)。これに対して高良は、「琉球史の個性」を取り込み、「新しい日本史像」を描くべきだと提案した(高良1993, 182)。また琉球・沖縄史の教科書を書いた新城俊昭は、「沖縄歴史を日本史にとりくむことによって、従来の日本史像をうちくずす、あらたな歴史の枠組みづくりをになうことさえできる」と論じた(新城2001, 1)。さらに日本史の中の琉球・沖縄の記述は十分でなく、「明治以降の日本近現代史を、沖縄の歴史と文化、そのなかに生きる人びとを欠落させたままの日本本土史として叙述すること」は、「一面的」だという厳しい批判もある(伊佐2007, 265)。

ところが戦前において日本本土の知識人山路愛山が、歴史における琉球・沖縄の重要性に注目していた。彼は日琉同祖論を肯定する「帝国主義的」歴史観を抱き、「琉球史の個性」を論じることもなく⁽¹⁶⁾、沖縄を訪問することもなかった。だが帝国主義の時代という制約の中で、山路は日本および琉球・沖縄などの「周辺地域」における女性の社会生活に注目し、その視点から良妻賢母を理想とする既成の日本女性像の再検討を試みた。山路愛山の先駆的な社会史研究は、皇国史観の嵐と太平洋戦争の惨禍の中で忘れられ、戦後史学の中でさえも顧みられないままだったのである(伊藤2005, 302-3)⁽¹⁷⁾。

註

- (1) 赤嶺守によれば、「現在「日本人」としての自らの位置付けを否定する沖縄県民はまずいない」が、琉球処分によって日本への統合が強行されたため、このような県民意識が定着するまで、相当長い意識変革の時間を要した(赤嶺2004, 215)。
- (2) 山路愛山の共同生活論の本質が国家論であり、個人よりも国家の絶対性が優先されるものであったという解釈がある(柳田2007, 388)。ところが、このような解釈では、国家主義者井上哲次郎に批判された福沢諭吉の自由主義的道德論をなぜ山路が擁護したかは理解できない(伊藤2005, 276-277)。
- (3) こうした伊波普猷の女性への関心の背景には、当時の思想界の動向が「自由を求め解放を求め

て止まざる生命力，個性表現の欲望，人間の創造性を強調しようとする傾向」にあるという認識があったと思われる（伊波[1924]2000，312）。

- (4) 後の研究者によって論じられた家族制度論には，山路愛山の主張と類似しているものがある。哲学者戸坂潤は，家族主義のような復古主義が「実はその原始化の理想にも拘らず，日本の最も発達した近代的資本主義が自分自身のために生み出した処の，一つの近代化に他ならぬ」と論じた（戸坂[1935]1977，183）。ハルトゥーニアンは，家族制度が太古から続くという「日本主義者」の主張を戸坂潤がフィクションとして退けたと指摘した（ハルトゥーニアン2007，184；Harootunian 2000，327）。また上野千鶴子は，「家」制度が長く「封建遺制」と考えられてきたが，近年の家族史研究によって，「家」が1890年の明治民法の制定による「明治政府の発明品」であることが明らかになったと論じた（上野1994，69，129）。上野によれば，厳密に排他的な父系直系家族は，明治以前の武士階級の間に見られたが，一般庶民には知られていなかった（上野1994，69）。さらに青木やよいは，日本的な「女らしさ」が伝統の産物ではなく，近代化の過程で儒教の影響を受けて成立したと論じている（青木1983）。
- (5) 天皇を頂点とする「国家の歴史」に「女の歴史」を解消させようとする山路愛山の主張は，自由主義的に見えても，実は巧妙に偽装された帝国主義と見られるかも知れない。だが丸山眞男や岡利郎が指摘したように，山路の思想の根本に個人の「独立と抵抗の精神」があるとすれば，彼を単純に「帝国主義者」と断定することには疑問が残る（丸山1992，97-99；岡1998，24，193）。
- (6) 義江明子は，「土蜘蛛八十女」と呼ばれる大勢の女の土蜘蛛が山に立てこもってヤマトの勢力と戦い，全滅させられたと「豊後国風土記」にあると指摘している（義江2004，74-5）。山路愛山が「女系を主とする種族」と呼んだのは，「土蜘蛛八十女」のような種族であったと思われる。
- (7) 後に柳田国男や中山太郎も，巫女と遊女・傀儡・白拍子との間に深いつながりがあったと指摘している（網野1994，18）。
- (8) 伊波普猷は，沖縄全体を「男逸女勞」と評するのは酷である」と述べている。なぜなら，首里・那覇の男子は昔はほとんどが官吏であり，特に那覇の女は外で商売などをして，ある期間無給で働く夫を養った。また，田舎では男女とも労働するが，その農産物を首里・那覇の市場に持って来るのは多くは女であった。このため沖縄の女が他の地方よりよく働くと見られた（伊波[1919]2000，61-69；鹿野2000，131-2）。「男逸女勞」に関する伊波の指摘が正しいなら，山路愛山の主張は皮相的だということになる。
- (9) 男女同権を論じた山路愛山は，当時の日本女性が置かれた状況に問題がないと考えていたわけではない。「工女を優遇せよ」という論説で，諏訪の製糸工場の工場主は「工女に身の不運を感じさせぬ様に」配慮するべきだと主張していた（山路1900c）。

- (10) 「琉球社会の特質 男系原理と女性の靈威」の中で赤嶺政信は、17世紀後半の羽地朝秀の政治改革以降、「王府が一貫して女神官の勢力を弱める政策を行っている」ことは確かだと論じ、神女組織が国王を頂点とする男性の官僚組織に従属していたと見ている(豊見山・高良2005, 197-8)。また山城彰子は、琉球女性の靈的優位という認識に留まることなく、「近世の女性の多様なあり方ひとつひとつに目を向け」るべきだと主張している(山城2008, 29)。山路愛山の琉球研究は断片的であり、このような踏み込んだ主張はしていない。
- (11) 山路愛山は「職業は男子の手にゆだね、女は内に働いてそこに新しい意味を探し出す方がよいと思う」という夫婦観を表明しており(山路1910, 15)、必ずしも今日的な意味での男女平等を唱えたわけではない。
- (12) 山路愛山は、琉球女性の政治への関与を詳細に論じていない。だが後に真境名安興は、徳川時代の大奥が御台所などの勢力によって政権に影響を与えたように、沖縄でも内原(うちばら)の勢力が無視できなかったと指摘している(真境名1919, 64)。
- (13) 女子教育を盛んにして家庭の改良を計るべきだと考えた伊波普猷は、「言語・風俗・習慣を日本化させること」が急務だと主張した(伊波[1919]2000, 84)。奥田暁子は、1903年ごろから沖縄の日本への同化政策が、「風俗改良運動」という名のもとに次第に盛んになったと指摘している(奥田1997, 34)。また、沖縄女性研究の先駆者伊波普猷が家父長制を超えることはできなかったという批判もある(勝方=稲福, 2006, 175)。こうした伊波の風俗改良論に対する批判は、山路愛山に向けられる可能性もある。
- (14) 他方、国家主義者井上哲次郎は、「家庭なるものは社会道德の基礎」であると主張し、「婦人解放」の議論に伴って「不健全な徴候」が現れて来たことを危惧した(井上1921, 1)。
- (15) 山路愛山が天皇制に疑問を抱くことはなかったのに対して、網野善彦は「日本人の意志によって、天皇が消える条件は、そう遠からず生まれる」と述べている(網野1991, 234)。このように二人の歴史家は、天皇観に関しては異なる立場にいた。
- (16) 『琉球新報』は、郷土史不在の歴史教育が「歴史なき県民」を沖縄に生み出していることを批判した(比屋根1981, 66-7)。沖縄における郷土史研究は沖縄人の自己認識の問題であったが、山路愛山の史論にはこのような視点はなかった。
- (17) 戦前の自由思想については、武田清子、田中浩の研究がある(武田2001, 田中1993)。

参考文献

青木やよい(1983)「性差別の根拠をさぐる—日本における近代化と儒教イデオロギーについての覚え書き」山本哲士編『経済セックスとジェンダー』新評論社。

- 赤嶺守（2004）『琉球王国 東アジアのコーナーストーン』講談社。
- 安里進・高良倉吉・田名真之・豊見山和行・西里喜行・真栄平房昭（2004）『沖縄県の歴史』山川出版。
- 網野善彦（1990）『日本論の視座—列島の社会と国家』小学館。
- 網野善彦（1991）『日本の歴史をよみなおす』筑摩書房。
- 網野善彦（1993）『日本論の視座—列島の社会と国家』小学館。
- 網野善彦（1994）『中世の非人と遊女』明石書店。
- 網野善彦（1996）『中世的世界とは何だろう』朝日新聞社。
- 網野善彦（2000）『日本の歴史00「日本」とは何か』講談社。
- 新井白石（原田禹雄訳注）（[1719]1996）『南島志—現代語訳』榕樹書林。
- 安良城盛昭（1989）『天皇・天皇制・百姓・沖縄—社会構成史研究よりみた社会史研究批判』吉川弘文館。
- 新城俊昭（2001）『高等学校 琉球・沖縄史』東洋企画。
- 家永三郎（1972）『津田左右吉の思想的研究』岩波書店。
- イ・ヨンスク（2002）「狭義の日本人と広義の日本人—山路愛山『日本人民史』をめぐって」（赤坂憲男他編『いくつもの日本（一）日本を問いなおす』岩波書店）。
- 伊佐眞一（2007）『伊波普猷批判序説』影書房。
- 石原道博編訳（1998）『魏志倭人伝・後漢書倭伝・宋書倭国伝・随書倭国伝』岩波書店。
- 伊藤雄志（2005）『ナショナリズムと歴史論争 山路愛山とその時代』風間書房。
- 伊藤雄志（2008）「琉球・沖縄史と日本史の接点—源為朝渡琉伝説をめぐる論争—」『地域文化研究』6号。
- 伊藤雄志（2010）「山路愛山の琉球研究—日本史の中の琉球・沖縄の位置—」『地域文化研究』8号。
- 伊藤雄志（2011）「山路愛山の鎖国研究—琉球・沖縄を含む周辺地域と日本—」『地域文化研究』9号
- 井上清（1955）『日本女性史』上，三一書房。
- 井上哲次郎（1912）「東洋古代の女性観」『国民雑誌』3巻4号。
- 井上哲次郎（1921）「婦人解放と風俗の頹廢」『丁酉倫理会倫理講演集』232号，12月。
- 伊波普猷（[1919]2000）「古琉球に於ける女子の位地」（伊波普猷『沖縄女性史』平凡社）。
- 伊波普猷（[1924]2000）「琉球民族の精神分析—県民性の新解釈」3月30日（伊波普猷『沖縄女性史』平凡社）。
- 上野千鶴子（1994）『近代家族の成立と終焉』岩波書店。
- 岡利郎（1998）『山路愛山 史論家と政論家のあいだ』研文出版。

- 奥田暁子（1997）『近代を読みかえる マイノリティとしての女性史』三一書房。
- 小熊英二（1996）『単一民族神話の起源』新曜社。
- 勝方＝稲福恵子（2006）『おきなわ女性学事始』新宿書房。
- 鹿野政直（1983）『近代日本の民間学』岩波書店。
- 鹿野政直（1999）『近代日本思想案内』岩波書店。
- 鹿野政直（2000）『沖縄の淵』岩波書店。
- 河野信子（1990）『高群逸枝 霊能の女性史』リプロポート。
- 金城正篤・高良倉吉（1984）『「沖縄学」の父 伊波普猷』清水書院。
- 工藤雅樹（1979）『日本人種論』吉川弘文館。
- 佐喜真興英（〔1926〕1982）『女人政治考』岡書院（『女人政治考・霊の島々 佐喜真興英全集』新泉社）。
- 佐高信（2004）『堪山除名 小日本主義の運命』岩波書店。
- 清水孝（1995）『良妻賢母の誕生』筑摩書房。
- 武田清子（2001）『天皇観の相克 1945年前後』岩波書店。
- 田中浩（1993）『近代日本と自由主義』岩波書店。
- 津田塾理科の歴史を記録する会編（1987）『女性の自立と科学教育―津田塾理科の歴史』ドメス出版。
- 戸坂潤（〔1935〕1977）『日本イデオロギー論』岩波書店。
- 長野ふさ子（1999）「八丈島と母系制―高群逸枝から読む」『女性と経験』24号，10月。
- 豊見山和行（2003）「琉球・沖縄史の世界」（豊見山和行編『日本の時代史 18琉球・沖縄史の世界』吉川弘文館）。
- 豊見山和行・高良倉吉編（2005）『琉球・沖縄と海上の道』吉川弘文館。
- ハルトゥーニアン，ハリ著，梅森直之訳（2007）『近代による超克 戦間期日本の歴史・文化』下，岩波書店。
- 比屋根照夫（1981）『近代日本と伊波普猷』三一書房。
- 藤澤健一（2000）『近代沖縄教育史の視角』社会評論社。
- 真境名安興（〔1919〕1993）「沖縄の婦人性」（『真境名安興全集』4巻，琉球新報社）。
- 丸山眞男（1992）『忠誠と反逆』筑摩書房。
- 柳田国男（〔1925〕1990）「妹の力」『婦人公論』（『柳田国男全集11』筑摩書房）。
- 柳田洋夫（2007）「山路愛山における「共同生活」概念について」『聖学院大学総合研究所紀要』37。
- 山城彰子（2008）「『王代記』にみる王（世子）と婚姻した女性をめぐる諸状況～婚姻・出産を中

心に〜』『首里城研究』10号，3月。

山路愛山（[1892]1983）「歴史家としての新井白石」『国民新聞』8月14日（岡利郎編『山路愛山集（一）』三一書房）。

山路愛山（[1893]1983）「人生」『国民新聞』4月6日（岡利郎編『山路愛山集（一）』三一書房）。

山路愛山（[1894a]1958）『新井白石』民友社（小尾俊人編『史論集』みすず書房）。

山路愛山（[1894b]1983）「歴史の話」『国民新聞』4月29日，5月1日（岡利郎編『山路愛山集（一）』三一書房）。

山路愛山（1899）「芸妓廃止の第一策」『信濃毎日新聞』4月16日。

山路愛山（[1900a]1917）「夜の国」『信濃毎日新聞』2月16日（内山省三編『愛山文集』民友社）。

山路愛山（1900b）「女の国」『信濃毎日新聞』8月29日。

山路愛山（1900c）「工女を優遇せよ」『信濃毎日新聞』11月2日。

山路愛山（1905）「平政子」『独立評論』10号，10月3日。

山路愛山（1908a）「為朝論」『独立評論』7号，9月3日。

山路愛山（1908b）「女子と財産」『女子文壇』4年16号，11月1日。

山路愛山（1909a）「為朝論」『独立評論』3号，3月3日。

山路愛山（1909b）「中流以下の女の働らき」『女子文壇』5年13号，10月1日。

山路愛山（1910）「美人の系統」『女子文壇』6年6号。

山路愛山（1912a）「生活難は憂ふるに足らず 若き婦人達は生活の独立に就いて考へよ」『女子文壇』8年6号，6月1日。

山路愛山（1912b）『乃木大将』民友社。

山路愛山（1914a）「日本国民史草稿」『独立評論』2巻11号，11月1日。

山路愛山（1914b）「日本国民史草稿」『独立評論』3巻3号，3月1日。

山路愛山（1916a）「日本及び日本の女」『婦人画報』118号。1月1日。

山路愛山（1916b）「日本及び日本の女」『婦人画報』119号，2月1日。

山路愛山（1929）「開国五十年史梗概」『山路愛山講演集』春江堂。

山路愛山（1949）『足利尊氏』岩波書店。

山路愛山（1966）「日本人民史」（『基督教評論・日本人民史』岩波書店）。

与謝野晶子（[1909]1985）「産屋物語」（『与謝野晶子評論集』岩波書店）。

義江明子（2004）『古代女性史への招待—<妹の力>を超えて』吉川弘文館。

脇田晴子（1995）『中世に生きる女たち』岩波書店。

Harootunian, Harry (2000), *Overcome By Modernity: History, Culture, and Community in*

Interwar Japan, Princeton and Oxford: Princeton University Press.

Ito, Yushi (2007), *Yamaji Aizan and His Time - Nationalism and Debating History*, Folkestone, UK: Global Oriental.

Ito, Yushi (2011), "The Legend of Minamoto no Tametomo: Controversy and Connections between Ryukyuan/Okinawan and Japanese Histories", in Jacob Edmond, Henry Johnson and Jacqueline Leckie (eds.), *Re-Centering Asia: Place, History and Culture* (Folkestone, UK, Global Oriental.

Tanaka, Stefan (1993), *Japan's Orient: Rendering Pasts into History*, Berkeley: University of California.

(ウェリントン・ヴィクトリア大学言語文化学部)

Japanese Women's History and Ryukyu/Okinawa -Yamaji Aizan's Study of Social History-

Yushi ITO

keywords : Yamaji Aizan, women's history, Ryukyu/Okinawa, good wife and wise mother, liberation of women

Abstract

Yamaji Aizan, a journalist of the Meiji and Taisho periods, studied the social lives of women in Japan and its 'neighbouring regions' such as Ryukyu and published historical essays which preceded the rise of social history in the post-war period. Like Iha Fuyu, the father of Okinawan studies, Yamaji argued in favour of the theory that Ryukyans and Japanese shared common ancestors and accepted 'the Disposition of Ryukyu' (Ryukyu Shobun) as a reality. However, he did not simply hold an 'imperialist' view of Okinawa, but stressed the role of women in trade and religion on the Japanese islands including Ryukyu. He criticised the commonly-accepted theory that patriarchy, which had been considered as the basis of the ideology of 'good wife and wise mother', was 'unique' to Japan since the foundation of the state. In this paper, I will suggest that Yamaji had high regard for the achievements of Arai Hakuseki, who emphasised the social role of women in history, and included Japan's 'neighbouring regions' such as Ryukyu in his study of Japanese history. In doing so, I will clarify that Yamaji criticised the stereotyped image of Japanese women based on Confucianism and advocated the necessity of liberating women.

(Victoria University of Wellington)